

42770K  
42770K

42770K  
42770K

4.306P

4347P  
4347P

978P  
1158P  
922P  
2026P

春夏  
六月十二日  
次々頁19行

とある、  
たーかに、是の年の暮れ、  
孝徳天皇の大化元年（六四五）十二月九日  
都は難波長柄豊碇へ遷さるることになる。  
孝徳紀大化元年（六四五）十二月九日条に  
こう記されてゐる。  
天皇、都を難波長柄豊碇に遷す。老人等  
相謂りて曰はく、  
鼠の難波に向きしは、都を遷す非なりけり  
と云々

総本家

④ 3528P

68巻 2507P

④ 3507P

4,307P

大和の570P  
子(人の子) 4下 219P 227P  
ネーニ多の

とある。  
●なお、鼠の移動を前兆とする記事は、以下  
孝徳紀に多い。  
●「鼠」(つまり子)とは  
人の子のことを指しているのではなからうか。  
●~~なるほど~~明確に記されているわけではない。  
か、次のような経過を考えてみたい。  
△皇極四年(六四五) 是の歳の春(正月)から夏(大  
月)に至るまでの間に、皇極天皇は多くの人  
々を従え、先ず難波(難波)へ向かわれ、  
難波から船で西に向かい、  
するところ、つまり大倭国・タクマが原の  
小笠田宮へと行幸(遷都)された。  
のであうと想像される。  
●ここに併せて見てゆきたいのは、  
の記事である。  
●~~元~~第六十八章へ二つの寺、  
と元興寺、  
●大倭国(肥後国)に、  
●倭国(大和国)に、  
かあったの、と述べたか、

4,308<sup>P</sup> 中大兄 紀下254<sup>P</sup> (こ)

板蓋宮 紀下260<sup>P</sup> 中4<sup>P</sup> 孝徳天皇 紀下254<sup>P</sup> 10<sup>P</sup> 257<sup>P</sup> 末2<sup>P</sup> 264<sup>P</sup> 3<sup>P</sup> 270<sup>P</sup> 1<sup>P</sup>

皇極紀三年(六四四)条から翌年の孝徳紀大化元年(六四五)条迄には、<sup>法興寺山</sup>の記述が四件あり、<sup>元興寺山</sup>の記事は無い。  
②また、皇極紀四年六月十二日条に、<sup>大</sup>極殿<sup>の</sup>記載があるとはいえず、<sup>後世の大極殿にあたるものが、板蓋宮にあったかどうか疑わしい</sup>。 (7日本書紀下) 日本書紀文学大系、岩波書店、二六二頁注二参照)  
こうしたことから、この物語では、<sup>中大兄らによる入鹿斬殺事件は、大倭国(肥後国)小墾田宮の大極殿が舞台になったのであろう</sup>。  
以下話を追めてゆきたい。

\*

④4290P

(七)

74<sup>3</sup> 3859<sup>8</sup>

⑦ 3968

③ 3972-1/2

+ 4325°

雄正, 善正, 4,309 P

新裁 元  
謀略 2024

OK

すでに述べたとおり、  
「ホ」を「ハ」に  
「ハ」を「フ」に

推古天皇の小墾田宮の宮城には、  
十二月

か  
あり、  
そ  
そ  
の  
門は兵達によ  
つて嚴重に

敬言固さ水

②  
そして宮城内には、  
朝堂院  
があり、  
その朝

堂院の北側奥正面に口大極殿凸があって、

さうにその奥深くに下口内裏に配置されてい

た  
の  
で  
あ  
ろ  
う  
、

と推察される(第14回他参照) 第七十四章 小笠田宮の構想

✱

さて、同年（皇極四年）の六月八日、  
中

おぼえ  
大兄は密に蘇我倉山田石川麻呂臣に

三轉 (高句麗・百濟・新羅) の調がたて

まつら  
水子  
日ひに  
は、  
おまえ  
に  
その  
上  
表文を  
読よ

み  
あ  
げ<sup>n</sup>  
て  
~~も~~  
ら  
お  
う  
と  
思  
う  
L

といひ、入鹿斬殺の謀略をうちあげた。麻呂

おみ  
臣は  
ろ  
水  
を  
承  
知  
一  
た  
。

来る六月十二日に、皇極天皇が大極殿へお

でましになることか確定していった。

紀下261<sup>7</sup> 26

紀上261<sup>7</sup> 26  
言々 818<sup>7</sup> 言々で祝う

4321<sup>7</sup> 14年へ入移した  
4,310<sup>7</sup>

入遷紀下262<sup>7</sup> 27

紀下249<sup>7</sup> 27  
4229<sup>7</sup>  
古人太子 紀下278<sup>7</sup> 17

●蘇我臣入鹿が天皇にしたいと願う古人大兄  
つまり古人太子が、皇極天皇のかたわらに侍  
されるとであらう。(皇極紀二年十月十二  
日条。孝徳紀大化元年九月三日条へ古人太子  
参照)  
●また、入鹿臣は大極殿のすぐ近くの庭上に  
あつて、南面してゐるに違ひない。  
●あるいは、その日(六月十二日)、  
皇極天皇が天皇位をお譲りになり、かわつて  
明天皇の長子である古人大兄(古人太子)が  
即位される段取りになつてゐたのかも知れない。  
(孝徳即位前紀、孝徳紀大化元年九月一日条  
等参照)  
●そして、この晴水の日、古人太子の即位を  
言奉ぐため、三韓(高句麗・百濟・新羅)  
の調が進められる予定になつてゐた  
と想像される。  
●あつとも、現代の解釈によると、  
「三國(高句麗・百濟・新羅)の上表を同  
時に奏する情況があり得たかは疑わしい。あ

4,311<sup>P</sup>

583<sup>P</sup> 783 500 次々 9行

土 11月 896P  
新 11月 2日 土 11月 2日

るいは、尋常のことでは朝参しない入鹿をお  
びき出すために日三韓の進調と詐ったか  
それとも高麗・百濟・新羅のいずれかの上表  
であつたのを日三韓と大きく記したのであろう  
：藤氏家伝に中大兄詐唱三韓上表、時人以  
為信然とある  
という。(「日本書紀」(下)日本古典文学大系  
岩波書店、二六一頁註二六参照)  
なるほど、三韓上表が実際にあつたのかと  
うか分からないが、三韓上表が行なわれ  
てもおかしくない大きな儀式が挙行されるこ  
とになつていたのであるから、  
だから蘇我入鹿は、不審感など抱かなか  
ったのだらうと思われ。

22611 疑ておみせられた

こと

4,312<sup>P</sup>

そうい  
相違  
相違  
1281<sup>P</sup>

大極殿前での入鹿斬殺

■その日、六月十二日の当日となり、蘇我入鹿が、宮城内にその姿を現わした。

■中臣鎌子連は、蘇我入鹿臣が疑い深いたち

で、昼も夜も剣を離さないことを知っていたの

で、能優へ滑稽な一ぐさで宮廷に仕える人

を使ひ、うしろをはずさせようとした。

■「なんだこの者は」  
能優は、入鹿にまとわりつき、一心に何事

かを訴えようとしていた風であつた。

■「なに、この剣を外せというのか」

入鹿は怪訝な顔をした。

■倭国（大和国）の板蓋宮においては多分、入鹿

は佩刀を許されていたのであろう。

■だから入鹿は、大倭国（肥後国）の小墾田

宮でも佩刀したままでよいと考え、疑っても

みなかつたに相違ない。

■察するところ、

■蘇我入鹿は、今迄にまた、大倭国（肥後

国）の小墾田宮の朝堂院内へ足を踏み入れた

こと

27

在子母心。前欠欠9分  
是101 320P

紀F262<sup>p</sup> 317 4.313<sup>p</sup>

こと<sup>い</sup>がなかつたのであろう<sup>か</sup> ✓  
と想到される。<sup>い</sup> <sup>か</sup> <sup>わ</sup> <sup>さ</sup> <sup>し</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>つ</sup> <sup>よう</sup>

ミニに入<sup>いりこ</sup>展<sup>ひ</sup>は、俳優<sup>わげひと</sup>の執<sup>しつ</sup>拗<sup>よう</sup>な要求<sup>ようきゅう</sup>を一喝<sup>いつかつ</sup>で退<sup>しりぞ</sup>けようとしたか、しか<sup>せつな</sup>その刹那<sup>せつな</sup>、一瞬<sup>いつしゅん</sup>躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>した。  
躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>した。

7  
もしかいたら、  
一一一ニ  
うーて  
俳優を使う

この私に悟らせようとの天皇も一くは太上天  
のは、あからさまにではなくてそれとなく、

皇の深い思ひ召しなにかも知れない。  
 と大倭国の都、小墾田宮の元大極殿に於て  
 やまとのくに *みやこ* *きはりたのみや* *だいごくでん* *おひ*

儀式ぎしきが行なわれるというのに、  
佩刀はいとうしたまま参入さん入

内  
す  
る  
と  
い  
う  
の  
は  
水  
多  
い

水を能優に預けると、朝廷の内へ入り、  
 そゝで入鹿臣は、笑つて剣をはき、

は 国 まさかこの直後 大極殿前が凄惨な修羅

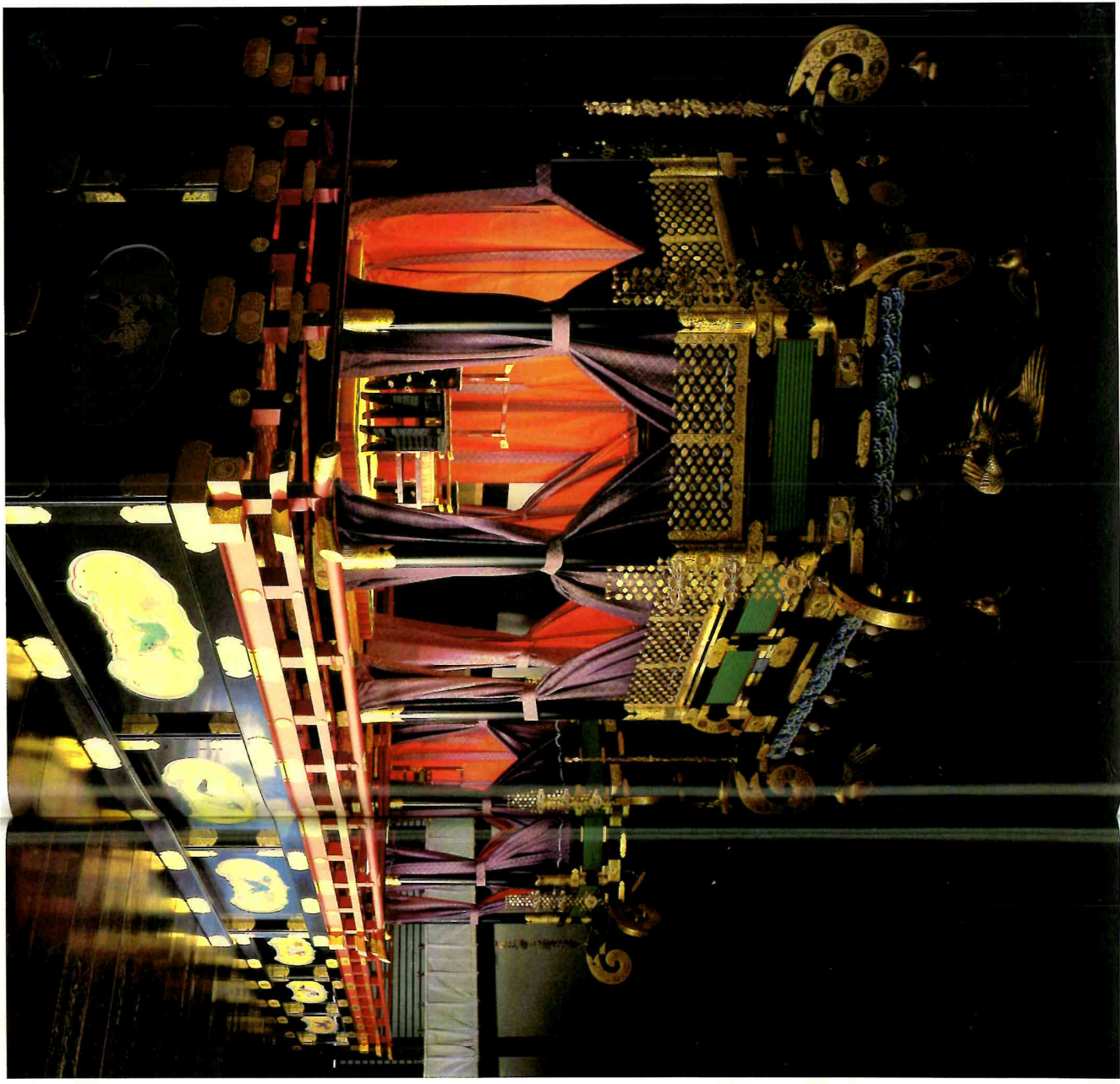
場になるうなとは、考えてもみなかった。

高野聖「大嘗祭の構造」118  
増田 260, 271 百科 19-287 頁に於ける。

向かいや威儀を正し朗朗と表文を読み唱へて

カラ  
・真の上粉、はみ出し  
大きく掲載下さい。

← 白、緑も、目立たなくして下さい。



↑ 白、緑を上に

4,314<sup>p</sup>-2/2

1404

写真図版 691 高御座

1304

京都御所 大宮・仙洞御所 京都新聞出版部 2004年10月発行 36~37頁参照  
高御座は 即位をはじめ 朝賀の大礼 外国使節の引見などにおいて天皇が  
着かれる玉座。平安京内裏では大極殿内に置かれた。

のど ひと え  
喉(のど) 1747  
紀下 263 頁18

4.315<sup>7</sup>

新 5 対小多  
長 小 次 7 9

7.3 三 下 262  
「年動く」とある

おり、蘇我入鹿は、中大兄に背を向け  
て、蘇我倉山田石川麻呂臣の方(南方)を凝視し  
ていた。  
なかのおほえ

中大兄は、海大養連勝麻呂に命じ下箱の中  
から二本の剣を取り出させ、佐伯連子麻呂と  
葛城稚犬養連網田とに授けさせて、

「ぬかるなよ。いつきに斬るのだ」  
と言った。

子麻呂らは、落ち着こうとしてのことであ  
ろうが、水をかけた飯を喉に流し込んだ。か

恐ろしさのあまり嘔吐してしまった。中臣鎌  
子連は、水を責め励ました。

へやみにしても屋すぎる  
蘇我倉山田石川麻呂臣は、上表文を読みあげ

のかいよいよ終りへ近づいてきたというの  
子麻呂等がいっこうに出てこないものだから

へさては手筈が狂ったのであろうか  
と不安が募ってきた。全身から汗が噴き出

し、声が乱れ、手が戦慄いた  
入鹿は、その様子を見て怪しみ、

「どうしてそんなに震えているのだ」

「どうしてそんなに震えているのだ」

振り替 1966 屋強 2634 振る 2282  
13はくれる 1130

4,316P

気配 697 紀下262 5行  
振り替 1968

2419 〇 〇  
X 〇

リビ 254 末2行  
④4301-1/3 (X 振の11コ  
紀下255 22

と尋ねた。  
蘇我倉山田石川麻呂は、従兄弟蘇我入鹿の問いに、  
「今までこんなにも天皇のおそば近く  
にいたことが無く、恐れ水多さに、不覚にも汗を  
かいてしまったのです。」  
この時、子麻呂等が入鹿の威に畏れをなし、  
突進しかねて、いるのを見て、  
「は、突如」と叫び、子麻呂等と共に大  
極殿の脇からおどろき出すと、いきなり剣で入  
鹿の頭から肩にかけて斬りつけた。  
入鹿は、ただならぬ気配に、声のする方  
を振り向きざま、身を振った。  
「何をなさる」  
あまりにも突然の、いかにも天皇の眼前での  
中大兄の暴挙に驚いた入鹿は、立ち上がった。  
その足もとに、鮮血が滴り落ちていった。  
「何をしらはしてくれておるか。お前の罪状は  
全て明らかになっているぞ。」  
その言葉も終らないうちに、入鹿を取り囲  
む屈強な男たちの頭上へ振り上げられた剣が、  
閃光を放って振りおろされていった。

中々見えない21 宇谷143? 263? 28  
印 752  
262 4,317

小林 437  
揮う ぶりまめす

563.7.11月  
防衛 防衛 2012

剣の切先を辛うじて避けながら、入鹿は言

った。  
私に、どんな咎があるというのですか

その時、これまで防禦一方であつた入鹿は、  
この時無意識のうちに腰へ手を伸していた。

しかし入鹿の剣は、そこに無かつた。  
ううむ、はかられたか

全てを察した入鹿の全身から、血の気が引  
いていった。  
その時、子麻呂が剣を揮って、入鹿の片方

の足に斬りつけ、傷を負わせた。  
入鹿は、血を流しながら転がるようにして

天皇の御座にすかりつき、大極殿前の広場の  
大地に叩頭（頭を地につけること）してこう言った

「いまここに日嗣の位についておいでにな  
るのは、未だ古人太子でなく、天子である

貴女様です。私が何の罪を犯したというのか  
分かりません。どうか、詳しくお取り調べにな

って下さい。葛城皇子（中大兄皇子）は、  
にやいて誤解しておられるのです

紀下263' 39  
山背 431' 9 梅原猛

井上 195'  
宇治 143'  
紀下 263'

せいばい  
成敗 1229'  
悔む 646'

4,318' P

山背 4289'  
紀下 263' 宗室 天1288'  
本家 天1000' 後

天孫を以て鞍作に代へむや

論語集解

皇極天皇はひとくお驚きになり、我が子中  
大兄を制し、詔して、  
「私にも全く分りません。いったいどうし  
たのです。何事かあってそのようなことをす  
るのですか」  
とお尋ねになった。  
中大兄は、地にひれ伏し、  
「鞍作（入鹿）は、天宗（王宗）を悉く滅し  
盡して、日位（天皇）を傾けようといてゐる  
のです。鞍作は、等与刀弥々大王の宗室たる  
山背大兄王らを盡し滅ぼしました。そもそも  
臣下の鞍作のために帝子（等与刀弥）（太伯の  
子孫の意か）が滅び、ということなごあつ  
てはならない筈でございます。いま鞍作を  
成敗しなかつたら、後で悔む事態になりまし  
よう。天孫をおいて鞍作に代えら小ましよう  
か」  
といった。（家伝・集解・紀参照。『日本書  
紀』『日本古典文学大系』岩波書店、二六三  
頁）

とろてい  
15/75

H3. 1. 6 (日)

ちぬ  
血塗

4. 319P

天つき  
改行

百人一首指原頼朝 3段目  
s. g. de 4319P

寵幸の近臣宗我鞍作（藤原鎌足伝参照）  
我が子の中大兄が裁断を仰いでいる。  
だが、それはあまりにも突発的な出来事であつた。一体、どう理解し、判断したらよいのだろうか。  
たしかに、山背大兄王は入鹿に殺されたとも言えよう。  
しかし、山背大兄王は、  
《天皇位に即くべきは、自分で決まないとお考えになり、自らの命を断たれたのだ。》  
こう思った思ひが、胸の内を駆けめぐつた。  
それにしても、この大極殿での儀式（皇極天皇の譲位および古人太子の即位の儀式であつた）は、一瞬にして血塗られてしまつた。  
不可能だつた。  
と、そのとき、ばらばらつと、中大兄に言い含められた女達が皇極天皇の御許にかけ寄せた。  
皇極天皇は、手を引かれ、促さず席をお立ちになり、大極殿奥の内裏の方へと歩を進ま

せう水た。

何事かきひとこと言いたそうに下振り返り振

り返りなからず、皇極天皇はせかされてお

行きになつてしまつた。

ここに、大極殿内にとり残された古人太子

は、どうしてよいか分からず下。うち震え

なから、中大兄らの様子を窺うばかりであつ

た。

一方、大極殿の階の下では、入鹿が齒軋し

て悔しがつていた。

よくもよくも謀つたな。倭国（大和国）

でならば、こんなにも易易と乗ぜらるゝ

となどなかつたらうものを

一かして宮城十二門が全て閉ざされてしま

つたその中に於て、もはや入鹿には一縷の

生きた望みさえ残さずなかつた。

哀れな丸腰の入鹿は、佐伯連子麻呂・稚犬

養連網田によつて、容赦なく斬り殺された。

かつて古人皇子は、入鹿を鼠にたとえ

鼠は、穴に伏して生き、穴を失ひて死ぬ

4303-1/2  
面4287  
-1/3154  
二言いたげな柿

紀下263<sup>注34</sup> 朝堂=朝廷 491<sup>小林</sup>  
 4.321<sup>P</sup> 井上下195

紀下252<sup>注1</sup> 宇治谷下135<sup>天つき改行</sup>  
 井上下186

と言われた。(皇極紀二年十一月条参照)

13.5<sup>cm</sup> 入展が、もし本拠を離れたならば、リカ

なる難にあうかも知れない

という意味である。(「日本書紀」(下)日本古

典文学大系、岩波書店、二五二頁、注一参照)

そのときの古人皇子の言葉通り 入展は

本拠地を離れたために袋の中の鼠となつてし

まい 逃れるすべもなく 死人だのだった。

是の日の雨が降つて ほとばしり出た水が

朝堂の庭に溢れた 人々は 席障子で入展の

屍を覆つた

木

なお 経緯があつたとすれは

へ 舒明上皇は、この儀式の場に 御臨席さ

れていなかっただろう

と思われ。

45.7.4(日) 5237下

あづか 5237下

431129

紀下264P注1

4,322P

紀下265P 左側/序文

OK

古人大兄、私宮に走り入る

そう、た一部始終を放心状態で見つめていた古人大兄が、

あたりに、中大兄の手の者達は何も居なかった。

皇極紀四年（六四五）六月十二日条に

「古人大兄、見走入私宮、謂於人曰、韓人殺鞍作臣。謂因韓政而誅上。吾心痛矣。即入臥内、杜門不出。」

とある。

日本紀

① 標註は「私宮」を「サキノミヤ」と訓んで「後宮」と解釈するか、古人大兄の私宅と解釈する説もある。

② 「韓人殺鞍作臣」について、通証は三韓

の貢調に託して殺したことを諱んで「三韓」とした。

の「日本紀」に「古人大兄が禍の身に及ぶ」とある。

を「三韓貢調はもとともと作爲で、たけの韓人を

作っていたが、それも立って共に殺害に与った。

495P 右エ ぬたのひめ  
奸人 人のいけな人 私の宮  
悪人 元下26ト所 4,323P

またぎき ぬ  
又開 2079P

たからかと ~~ト~~ 述べ  
③「~~謂~~ <sup>い</sup> ~~因~~ <sup>より</sup> ~~韓~~ <sup>ニ</sup> ~~政~~ <sup>かし</sup> ~~而~~ <sup>チ</sup> ~~誅~~ <sup>スト</sup>」と ~~分~~ <sup>ぶん</sup> 注があるのも  
当初 <sup>とう</sup> からその解 <sup>かい</sup> 釈 <sup>しやく</sup> が難 <sup>むづ</sup> かしかったからであ  
う  
という。(「日本書紀」(下) 日本古典文学大系  
岩波書店、二六四頁注一、二参照)  
しかし、あえて述べると、  
又聞き <sup>またぎき</sup> 又聞き <sup>またぎき</sup>  
13.5 2M  
「聞いた人からさらに聞き知ること」  
た者の文面 <sup>もの</sup> をよそおって書 <sup>か</sup> かれていよう  
不明瞭 <sup>ふめいりょう</sup> に  
に思 <sup>おも</sup> われる。  
つまり、  
ある者 <sup>もの</sup> が、  
「古人大兄 <sup>ふるひとのおほえ</sup> は、見てシキユウ <sup>しきぎゅう</sup> 私宮 <sup>しきのみや</sup>、古人 <sup>ふるひと</sup> <sup>おほえ</sup> の私宮 <sup>しきのみや</sup>」  
大兄 <sup>おほえ</sup> の私宮 <sup>しきのみや</sup> ~~もしくは紫宮 <sup>むらきのみや</sup> に走り入ると、~~  
人にこう言 <sup>い</sup> われまいた。  
カンジン <sup>かんじん</sup> (奸人) が、鞍作匠 <sup>くらつくりのあみ</sup> を殺して  
まった。私の心 <sup>こころ</sup> は痛 <sup>いた</sup> む。  
そして、古人大兄 <sup>ふるひとのおほえ</sup> は、臥内 <sup>ふうち</sup> に入ると、門 <sup>かど</sup> を  
杜 <sup>さ</sup> して、出 <sup>で</sup> ておいでにならないのです。  
と云った。

小枝 562P  
チユウ

三韓の謂が進ら小ようといいた時に起  
たこの事件について、又聞き取りた者が  
う書き綴った。  
古人大兄、見て私宮に走り入り、  
謂ひて曰はく、韓人、鞍作臣を殺し、  
政に因りて誅せらるるを謂ひ、吾が心痛し、  
といふ。即ち臥内に入り、門を杜して出で  
ず、書き綴ったのだ。  
と、な、中大兄（後の天智天皇）らのことを  
なお、中大兄（後の天智天皇）らのことを  
口々に（悪人）と書けば、あまりにも恐れ  
多いので、万葉仮名的に当字で韓人とし  
る。たのもいえないやうか。  
●ともあれ、内容からいって、韓人とは  
なかのおほえ、なかとみのかまこのむらじ、  
中大兄・中臣鎌子連・子麻呂・網田等を指し  
ているやうである。（要検討）

\*

972カブの小型車 3317-1/3, 3836 2/4

世對 元  
直教 1261

張興年242リ④4300<sup>P</sup>

紀下 174<sup>5</sup>

⑦ 4301-1/3

4th 20K H11. 10. 31 (2) 6

日本銀行 545' 6" 下 270' 6" (石川町8)  
 石川町 18-402-3' 4.325  
 2.34301-1/3

雄正  
④ 4301

4400

→ H5.7.5(月)  
49.2.15(±)

蘇我大臣蝦夷の死

蘇我氏本家筋の滅亡

なかのあほえ

中大臣らは、いっまでも大極殿や朝堂院を

占  
扱  
1  
7  
11  
2  
わ  
け  
に  
困  
い  
か  
ず  
夕  
夕  
マ  
か  
原  
の

小堀田宮を出て下  
別荘  
小堀田宮の南の法

興寺へ入り、この寺を城として備えを固めた。

か  
つて  
(推古四年十一月)  
法興寺を造り

竟った  
勝、  
蘇我馬子は  
長男の善徳  
臣を寺司と  
し

たのだったか、  
今、  
中々大兄らをニ

はろわん  
みちやん

の法興寺へ導いてきたのは、  
蘇我馬子の孫

雄正（倉麻呂）の子である  
蘇我倉山田石川

林呂臣であつたらうか。  
ちぢ  
をまゐ

な お、  
倉山田石川麻呂の父曰雄正弓（倉麻

名)は「日善徳臣」の子だったのか――を

本とも  
 雄正  
 〇  
 倉麻呂  
 〇  
 善徳  
 臣  
 〇  
 その

で あつたのか、  
など  
詳しくは分からない  
くちやまのいなかのまう

いすかにせよ  
倉山田石川麻呂は

人倭国(肥後国)の法興寺と深いかかわりが

あつた。とであうう。と思われる。

己<sup>おのれ</sup>のた<sup>だ</sup>と<sup>い</sup>思<sup>おも</sup>つて<sup>い</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>知<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>后<sup>ご</sup>  
 倉<sup>くら</sup>山<sup>さん</sup>田<sup>でん</sup>石<sup>せき</sup>川<sup>がわ</sup>麻<sup>あ</sup>呂<sup>ろ</sup>は<sup>は</sup>  
 蘇<sup>そ</sup>手<sup>て</sup>戸<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>然<sup>しか</sup>本<sup>ほん</sup>家<sup>け</sup>は<sup>は</sup>  
 おおきく<sup>おおきく</sup>石<sup>せき</sup>川<sup>がわ</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>40<sup>40</sup>

148 长子紀下175頁至19 (OK)

⑤  $4301^P - \frac{1}{3} \cdot 5$

see ④ 4301-1/3 中央 戒名(かみみお)号外と7 8

4.326<sup>P</sup>

天正改行

改行

改行

凡ての諸の皇子・諸王・諸卿大夫・臣・連  
・伴造・國造のことごとくか、口法興寺に  
城とする中大兄に従った。  
ここに中大兄は、人を遣わし、  
屍を大臣蝦夷に賜わった。(紀)  
●もつとも①鞍作の屍を、いったん法興寺へ  
持つてきて、その後を遣わし、大臣蝦夷に  
送りつけたのか、②それともただたん  
に人を遣わし、  
鞍作臣の屍を大臣蝦夷に賜うし  
と言わせただけのことなのか、  
明確でない。  
ともあれ、こうして宣戦布告されたのであ  
ろう。

\*

ほんらい 2060P  
本来 もと

4,327P

いなめ  
蘇我稲目 向原寺

紀下102P

蘇我大臣蝦夷はF259P

前12行明破で

居たのだらうか。  
こゝも定かでないか、  
表は、欽明十三年（五五二）に蘇我大臣稲目  
官禰が、欽明天皇から受けたまわった、仏像を  
置いたという。曰小墾田の家、あるいは曰私  
宮にたててもったのかも知れない。  
宮、そして、蘇我大臣蝦夷の陣営は、曰小墾田  
宮と同様、タクマが原にあったのだらうかと想  
像される。  
北の蘇我大臣蝦夷の軍が睨み合ったように思  
われる。  
北の古人大兄の陣営であつたのだらう。  
古人大兄が天皇として即位されるのを望む者達  
は、古人大兄の陣営へよくよく集まつてき  
たに違ひない。  
■だが、何といたとかが、軍の中樞に  
嚴然として居るべき筈の古人大兄は、臥内へ  
入ったまま、門を閉ざして出ようとなさうなかつた。

H5.7.6(2) 関輝略表  
115-5035

紀下264

紀下133

入鹿臣 紀下259

4328

196  
紀下264

紀下264

紀下250

井上196  
宇治谷144  
紀下264

漢直は蘇我の内  
かためていた。 4302末4行

■ といふものの下戦わなれすすますわけにはいか  
なかつた。  
■ 是に、漢直らは族党をみな集め、甲をつけ  
武器を持ち、大臣を助けて軍をしようとした。  
■ そんな時、皇極二年十一月に入鹿の命  
で山背大兄王らを斑鳩に襲ったあの將軍巨勢  
徳陀臣が、中大兄の陣営からやってきた。  
■ 巨勢徳陀臣は、中大兄の軍勢の意気盛んな様  
子などを告げ、大臣蝦夷の軍に勝ち目はな  
いと語ったのではなかつた。  
■ 怖気付いた高向臣國押は、漢直ら  
に、われらは君(大郎)へ入鹿臣のことで死刑  
に処せられるだろう。蘇我大臣も今日明日の  
うちにきつと殺される。そのような人の爲に  
空しく戦い、みんなが処刑されるなど馬鹿げて  
はかたしい。いゝではないか。  
■ と言ひ、言ひおねると剣をはずし、弓を放り  
投げ、去つていった。  
■ それにつられて、漢直らもまた、ちりちり  
に逃走してしまつた。  
■ 翌十三日、中大兄の軍は、激しく蝦夷の  
目差すは、蘇我蝦夷を

中大兄の<sup>ト</sup>大軍に<sup>かこ</sup>囲まれ蘇我蝦夷は<sup>そがのえみい</sup>死を<sup>し</sup>覚悟した。敵軍の<sup>てきぐん</sup>喊声か<sup>かんせい</sup>四面にあつて、

のかれる術はなかつた。

あるいは火矢が次々に打ち込まれたのであ

ろうか。それとも自ら火を放つたのだらうか。

それは定かでないか、やかて建屋に火の

手上がり<sup>あ</sup>みるみるうちに燃え広がつていつ

た。

蘇我大臣蝦夷は、争いようもなく、

中大兄軍の兵達によつて誅された。

この火事の際、天皇記<sup>すめらみことのみ</sup>に、國記<sup>くにのみ</sup>におよび

珍宝に火が迫つた。かしこの時、船史恵尺は、

すばやく焼かれようとする、國記<sup>くにのみ</sup>を取り出

中大兄にたてまつた。

こうして、遅かれ早かれ茶毘に付されるこ

とになつてゐた、天皇記<sup>すめらみことのみ</sup>に、数多くあつたで

あろう天皇記のうちの一冊<sup>いっさつ</sup>が、逸速くこの

日焼失した。

なお、船史恵尺の働きによ

つて、<sup>なん</sup>難を免れたとはいえ、この<sup>くに</sup>國

記<sup>ふ</sup>もまた、いつの日<sup>ひ</sup>に抹殺<sup>まっさつ</sup>される運命<sup>うんめい</sup>にあつたといえようか。

＊

■なるほど、日本書紀に記されているとおり、この戦<sup>たたか</sup>いの時<sup>とき</sup>の火事<sup>かじ</sup>により、天皇記<sup>すめらみことのみみ</sup>はおよび珍宝<sup>たあらもの</sup>は焼<sup>や</sup>けてしまったのだであらう。

■しかしながら、天皇記<sup>すめらみことのみみ</sup>が当時一冊<sup>いつふみ</sup>しかなく、これが燃<sup>も</sup>えてしまったて、天皇記<sup>すめらみことのみみ</sup>が完全に失<sup>う</sup>われてしまった、とは解<sup>かい</sup>し難<sup>がた</sup>い。

■火災<sup>かさい</sup>については特に慎重<sup>しんじゆう</sup>であつたであらう

この時代<sup>いまだい</sup>

△焼失<sup>しょうしつ</sup>に方<sup>むかひ</sup>りて何<sup>なん</sup>ら備<sup>そな</sup>へることもせず、日本国の中心<sup>しんしん</sup>的書物<sup>てきしよぶつ</sup>であり、重要<sup>じゆうよう</sup>この上<sup>う</sup>もないう天皇記<sup>てんかうき</sup>が、この世<sup>よ</sup>にたった一冊<sup>いつふみ</sup>しか存在<sup>そんざい</sup>しなかつた。

とは考えにくいように思<sup>おも</sup>われる。

△幾冊<sup>いくさふ</sup>もの天皇記<sup>てんかうき</sup>・国記<sup>こくき</sup>が、万<sup>まん</sup>一の場<sup>ば</sup>合<sup>あい</sup>の為<sup>ため</sup>に書<sup>か</sup>き写<sup>うつ</sup>され保管<sup>ほかん</sup>されてゐた。

と解<sup>かい</sup>釈<sup>しゃく</sup>すべきなのではあるまいか。

△では「後年<sup>こうねん</sup>、——こゝ等の書物<sup>しよぶつ</sup>は、

ねっか 哭仕う  
 紀下 264 13行  
 4,331

大臣と云っている  
 紀下 264 末5行

理想とする国史 日本書紀の中に組み込ま  
 れ 中の編纂作業が完了した後  
 人知れず、灰になった 消えていったの  
 のだろう、と推察される。

＊

是の日（六月十三日）、皇極天皇は、蘇我  
 蝦夷および鞍作（入鹿）の屍を墓に葬るこ

とを許し、また哭泣（喪にあたつて悲しみ泣  
 くこと）を許された。（紀）

なお、蝦夷や入鹿が、本當に日本書紀に

記されていゝるような権力をほいままに

た極悪人であつたならば、  
 誅された二人の屍を墓に葬ることや、

哭泣すること、  
 など許される訳はあるまい。  
 止むを得ない事の成り行きによつて、入鹿

563.6.16(7)  
 ④4336 ⑤1/4 2099  
 see! ⑥4305P

$$\begin{array}{r} 3/16 \overline{) 3/15} \\ 3/14 \end{array}$$

トル  
 本皇位を同母弟の輕皇子（孝徳天皇）へお譲  
 りになり、御自身の子中大兄を皇太子とされたと  
 次（六月十四日）  
 皇極天皇

衣ぎぬをきせられてゐるように思おもひえてならない。  
 蘇我馬子・蝦夷・入鹿ともども、あらぬえぬ需え。  
 日本書紀は、勝者の側がわに立つ者の手によ